

ベトナム中部、ビンディン省の農村へ行ってきた。ちょうど稲刈りの季節ののどかな農村風景を見ることができた。ビンディン省は、ベトナムの中でも工業化が遅れた地域であり、所得も低く、昔からの変わらぬ農村風景が残っているのは、経済発展の遅れの裏返しでもある。

しかし、筆者には見慣れているはずの農村風景も、じっくり見てみるとちょっとした違和感を覚える。まず目を引いたのは、刈られた稲が作る変わった模様である（写真①）。この地域特有の稲刈りの慣習でもあるのかと地元の人に聞いてみると、これは近年、稲刈り機の導入にともない見られるようになったものだという。

写真②がその稲刈り機である。見てのとおり、日本から輸

入された中古の草刈り機を改造したものである。刈った稲が一定方向に倒れる工夫も施されている。ベトナムの他の多くの地域では、1台200万円以上するコンバインの導入が進んでいるが、貧しい中部のこの地方



写真①

## ベトナム・ビンディン省の 草刈り機

では、このようなローカルな発明品による農作業の機械化が行われていた。

変化したのは稲を刈る方法ではなかった。稲刈りはもはや家族や共同体単位で行う作業ではなく、お金を払って業者に委託する作業になっている。稲刈りの季節には、4～5人で構成されるたくさんの稲刈りチームが、バイクであちらこちの田んぼを回って稲刈りを請け負っているという。稲刈りの季節に農家が行うのは、脱穀（これも脱穀チームに委託！）後の稲わらを運搬する作業のみである。

さらによく見ると、田んぼに若者の姿をほとんど見かけない。この村では、多くの若者がホーチミンに出稼ぎに行ってしまう、定住して戻って来ないのだという。ベトナムの製造業が出稼ぎの若者たちで支えられている一方で、農村では高齢化が確実に進行している。中古の草刈り機を改造したこの稲刈り機は、農村の高齢化による労働力不足を解決するためのローカルな知恵、イノベーションなのである。



写真②